郡市医師会だより

渡島医師会創立60周年記念文化講演会

渡島医師会副会長　宮　村　拓　郎

平成19年6月30日、平成19年度渡島医師会臨時総会と創立60周年記念の文化講演会が行われた。臨時総会では、今後も続く厳しい医療情勢に関し、大北健雄会長、三宅道医師会副会長より挨拶があり、その後は役員功労表彰、平成18年度の決算報告と承認がなされた。

引き続き、会場を変えて渡島医師会60周年記念文化講演会「食を愉しく」が約100名の聴講者を迎え行われた。講師は1995年の第8回世界最優秀ソムリエコンクール優勝者で、テレビ出演も多い田崎真也氏である。まず、大北会長より、本年9月には当医師会の60周年記念式典と武見敬三前厚生労働副大臣による講演会が予定されているが、本日の講演会は、普段、会員を支えている家族、病院職員の方々へ感謝する意味で、皆が参加しやすい肩の凝らない講演会として企画したものであるとの挨拶があった。

田崎氏の講演内容は多岐にわたり、やや早口ながらまさに立て板に水の話しぶりで、皆時間を忘れ聞き入っていたが、要約すると以下のような内容であった。

1. ポリフェノールの一種であるレスペラトールには抗動脈硬化作用と老化予防作用があるとされているが、その含有量の多いワインでも生体で実際にその作用を発揮させるには1日数十本を飲まないといけないという落ちある話　2. スローフードとは、ファストフードに対立する言葉で、その土地の伝統的な食文化や食材を見直す運動であるが、その発祥はイタリア北部、ワインのバローロやトリュフで有名なピエモンテ州であり、この地区を、フランスのブルゴーニュ地方と同じように有名にしようという力も働きスローフードという活動が広がっていったという話。3. 「おいしさ」の表現の仕方が少し変であるという話。すなわち、ビールが冷たくておいしい、肉がやわらかくておいしい、などという表現は、温度や硬さを表現したもので味の表現としてはおかしいので、もっと適切な表現をしようという話。4. ワインの香りの表現方法は、「濡れた猫の毛の香り」など一般人には不思議と思われる表現もあるが、これらはソムリエの世界の万国共通語であるという話。5. 田崎氏は自分が日本人であることから、日本酒のおいしさ、味わい方を外国に広めることが使命であると考えているという話。ちなみに、日本酒独特の温度を変化させること、すなわち燗の仕方で食事との相性を良くすることが可能であるとのこと。6. 食事とワインの白、赤の合わせ方は、食材が魚の場合、ムニエルならば白だとしても、内臓を使ったソースを絡めるなら赤もありである、すなわち食材によってというよりは、調理法によって選択すべきであるという話。7. レストランでの少人数での食事の場合は、各自別々の料理を頼むのもよいが、時には同じ料理にしてそれに合うワインを注文することでおいしさを同時共有でき、話題が広がることがあるという話、等々。

田崎氏の講演は単にソムリエの知識の一部を我々に伝えてくれただけではなく、食を媒介とする人と人とのコミュニケーションを大切にすべきであり、そのことが食事を愉しくするものであるということを再認識させてくれた非常に印象深いものであった。

引き続き行われた懇親会では、まず、田崎氏から各テーブルに置かれた数種類のワインについて解説をしていただき、皆でそれぞれのワインの香りと味を楽しんだ。その後、各テーブルでは田崎氏を囲んだ懇親の輪が広がり、その中で気軽に参加者との記念撮影にも応じていただいた。

改めて、田崎真也氏に感謝申し上げる。

札幌市医師会市民対話集会2007

200X年、医療が危ない！介護が危ない！2

札幌市医師会理事
政策部長　鈴木伸和

今年度の市民対話集会は8月4日（土）午後1時半から2時間にわたり札幌市医師会館5階大ホールで開催されました。司会は昨年と同じキャスターの佐藤のりゆきさんにお願いし、「200X年、医療が危ない！介護が危ない！2」と題して昨年の市民対話集会の続編という形で行われました。

集まった市民は235名、昨年よりも大幅に増え、市民の医療や介護に対する関心が徐々に高まっていることが実感されました。

さて、会は河西紀夫副会長の開会の挨拶で始まり、続いて私が「医療と介護の未来について」というテーマでお話をさせていただきました。要旨は平成23年度末までに介護療養病床が廃止されることを受けて、療養病床の削減が行われること、代わりに介護施設が作られ、入院患者はそちらに移ることになると厚労省は説明しているけれども、実際には介護施設への転換はそう簡単ではないこと、介護施設ではみることのできない入院患者も少なからずいることなど、今後の入院、入所施設の不安点を挙げました。在宅介護についてもコムスン問題に端を発した不安点を挙げ、医療と介護の未来はどうも明るく思えないので、本日のディスカッションで光明を見いだしてほしいという言葉でメインのパネルディスカッションにつなげさせていただきました。

パネルディスカッションのパネラーは定山渓病院院長の中川翼先生、医療法人社団眞明会今医院院長の今眞人先生、札幌市保健福祉局健康衛生部長の館石宗隆先生、北海道新聞社編集局生活部記者の荻野貴生氏の4氏で、司会の佐藤のりゆき氏の隣に私も座らせていただきました。

会の口火を切ったのは中川先生です。中川先生は療養病床に入院されている家族に介護療養病床廃止、療養病床の削減に関するアンケートを行った結果を紹介してくださいました。それによると家族の約95％が療養病床の削減に反対、そして自宅での介護は無理と答え、その理由として、容態が変化した時対応ができない、自宅の設備に不安、自分も高齢・病弱、勤めに支障をきたすなどを挙げているとのことでした。

これを受けて佐藤のりゆき氏は、各パネラーにそれぞれの立場で意見を求めました。館石先生は行政の立場から国が安心できる介護施設作りに取り組んでいることを紹介されました。荻野氏は自身のご家族のお話も交えて認知症患者のいく場所が実に少ないことの不安を述べられ、今先生は「生まれてきてくれてありがとう・・・。長い間ご苦労様・・・。もう当たり前でなくなるのですね」という市民アンケートの言葉を紹介し、財政抑制を最優先させ命を軽んじる国の政策を嘆いていました。

会は佐藤氏の軽妙な司会で討論会という形で各パネラーの意見を上手に引き出し、途中来場者100名にボタンを押してもらい感想を求めるコーナーを織り交ぜたこともあって、最後まで聴衆を飽きさせることなく展開されました。

最後に佐藤氏は医療費抑制一辺倒の国の姿勢に対して「われわれ生活者が医療をめぐる動きを厳しくチェックしなければいけない」と強調し、会は締めくくられました。